

「人はパンだけで生きるものではない」

ルカによる福音書 4章4節

ウラジーミル・レーニンは、1917年12月に執筆した論文「競争をどう組織するか？」の中で、「『働かざるものは食うべからず』——これが社会主義の実践的戒律である」と述べました。レーニンがこの言葉を使った際には、労働者を酷使し「不労所得で荒稼ぎする資本家達」を戒める意味合いがそこにはあったようです。

しかし既に AD50 年から 51 年頃に使徒パウロがテサロニケの教会に宛てて書いた第二の手紙の 3 章 10 節で「実際、あなたがたのもとにいたとき、私たちは、『働きたくない者は、食べてはならない』と命じていました。」と書き、怠惰な生活を送っていた人々に「自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい」と命じました。労働と食料との関係を示したのです。

更にその 50 年前に主イエス・キリストが「人はパンだけで生きるものではない」と言われました。これは主イエスが 40 日間荒れ野で断食されたとき悪魔が石をパンに変えてみると誘惑されたのです。主イエスが砂漠で飲まず食わずの生活を体験し、心身共に弱り果てていた最中「あなたが神の子であるならば石をパンに変えて食べてみなさい」と唆したのです。しかし主イエスは小さいときから学んできた聖書（旧約聖書）の申命記 8 章 3 節「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言

葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」を思い起こしてこの誘惑を払いのけたのです。

人は何によって生きるのか、それは人は確かに物質であるパンで生きるのです。でも人はパンだけで生きるものではないのも確かなことです。精神・心・ことばによってはじめてよく生きるのです。物質を保証すれば人間は幸せになるのか、物質万能主義がどれだけ人間を不幸に追いやっていることでしょうか。

子どもはお母さんの愛の言葉を、お父さんの愛の言葉を心底求めています。かく言う大人の私達も実態を失った言葉が氾濫している中で、裏切られない真実な言葉に飢え乾いています。その言葉をずっと追い求めていくと神の言葉である聖書の言葉、主イエスの言葉に行き着くはずです。様々な物質を餌にした誘惑が待ち受けている中で、それらに勝利し排除するためには「主の口から出るすべての言葉」が必要なのです。

ゲーテは「涙とともにパンを食べた者でなければ、人生の本当の味はわからない」と言いました。悔し涙、悲し涙、うれし涙、寂し涙、落胆涙、絶望涙それぞれに涙の味が変わりますが、そんな時でも空腹になる自分に涙して、パンの欠片をかじりながら人生を味わっているのではないのでしょうか。

牧師；西田直樹